

パレスチナ赤新月社医療支援事業への派遣を終えて

国際医療救援部 渡瀬 淳一郎

去る2018年11月より2019年2月にかけて、当該事業に医師としてレバノンのベイルートに派遣され帰ってまいりました。この事業はパレスチナ難民、シリア難民支援の一貫として日本赤十字社とパレスチナ赤新月社の二国間事業として2018年4月より開始されたもので、早1年が過ぎました。

活動地であったベイルートのブルジュブラジネ難民キャンプにあるハイファ病院は、スタッフのほぼ全員がパレスチナ人もしくはシリア難民という病院です。彼らは原則的に難民キャンプの中でしか働くことが許されず、低賃金の環境で必死に生計をたてながら働いています。

私達はこの病院のERの診療の質の改善に取り組んできました。といひましても彼らの多くは私より年上です。そして優秀な彼らにいくら世界の標準知識といっても、上から目線で伝えることはできません。新しく知り合った小学校のクラスメートと仲良くなるのと同じように、私達も徐々に彼らと親交を深めていきました。アラブの朝の挨拶はとても大切です。しっかりお互いを見つめながら、同性同士はハグや握手をし、異性同士も丁寧に挨拶をします。そんな毎日の彼らとの交信を通じて、少しずつ彼らと親しくなっていくことができたように思います。その上で、彼らに今後も少しでも残るようなものをと努力をしましたが、正直、異国の地で教えることは簡単ではありませんでした。一方で今後も続く事業の基礎をつくるため、現地のパレスチナ赤新月社のスタッフや各国赤十字スタッフ、次の事業地であるハムシャリ病院のスタッフとの関係づくりができたと思います。

今後も事業は続きます。全て終わった時にパレスチナの皆さんも日本の皆さんもお互いにいいものが作れたと思えるよう、それぞれの立場で努力していけたらと思います。

最後に、ご支援くださっている全ての皆様に心より感謝申し上げるとともに、これからも国際医療救援部にご支援の程をよろしくお願い申し上げます。



病院の方々に送別をしていただきました



トレーニング風景。患者さん役は、同じ大阪日赤の看護師です。